

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/

tokyo/index.html

E-mail:comm.tko@nsk.k.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



新年礼拝・合同堅信式説教

包み込む神とともに

主教 フランシスコ・ザビエル 高橋 宏幸



1月11日(土) 13時から聖アンデレ主教座聖堂で新年礼拝及び合同堅信式が行なわれました。出席者は約90名、堅信を受けられた方は12名でした。今回、その時になされた主教の説教を掲載させていただきます、私たちの信仰の指針として受け止めたいと思います。

まず初めに、今ここに「堅信式」の機会が与えられたことを感謝いたしますとともに、「主の導きにより堅信を志願して」と祈禱書にはつきりと記されているように、導いて下さった神様に感謝を捧げたいと思います。

幼児洗礼の方は記憶にないでしょうが、ある年齢を超えて洗礼を授かった方は、その準備の中で、あるいは洗礼式の中で「使徒信経」という信仰告白を学び、唱えたことを、あるいは、朝夕の礼拝や祈りの中で唱えている方がたも少なくないでしょう。

その「使徒信経」の中で、そして、この後になされる

「洗礼の約束の再誓約」の中に、繰り返して「信じる」という言葉が出てきます。そもそも、聖書やキリスト教が大事にしている「信じる」とはどういうことでしょうか。

言うまでもありませんが、それは、聖書に照らし、あるいはまたイエス様の思いと言葉と行いに照らしながら常に自らの生き方、在り方、立ち位置を問いつつ、選り続けたり、選り続けたりすることです。つまり、知



識の中、頭の中に神様がいらっしゃるのではなく、神様を中心に、イエス様の教えや歩みを中心に、自らを問い、整え、修正し続けていく、その在り方を聖書は促し続けています。先ほど触れた、別名「洗徒信経」、あるいは聖餐式で唱える「ニケヤ信経」の出だして、

出だして、こういう告白をします。「わたしは、天地の造り主、全能の父である神を信じます」「わたしたちは、唯一の神、全能の父、天地とすべて見えるものと見えないもの、造り主を信じます」

これらの信仰告白の冒頭にある「天地の造り主」と

いう言葉を耳や口にする時、ともすれば、宇宙の成り立ちといった宇宙科学や有名な進化論の方へ気持ちが向きがちになります。しかし、代表的な二つの信仰告白がうたい上げているのは、神様は生きとし生けるものに命を注ぎ込んで下さった、そして今も注ぎ続けて下さっているということです。

そこに依って立つことなくしては、私たちは霊的に、信仰的に生きることは果たし得ないのです。つまり、「今、自分は何によって生かされているのか?」「どこに立ち、どこに向かっているのか?」が絶えず問われ続けているのです。とりわけ思春期や若い頃には、よく自分の中で問うテーマがあります。

「自分は、何のために生きているのだろうか?」「生きていく意味って、何だろうか?」「生きていくことに、果たして意味があるのか?」



そういう問いに対して一つの示唆を与えているのが、信仰告白です。つまり、命を授けて下さり、その命を生きるべく呼び掛け、共に歩み続けて下さる神様が、イエス様がいらっしゃる、その呼び掛けに応えて、私たちが生きることを見、祝福し、喜んで下さる方がいらっしゃるのです。

古くキリスト教界を代表する偉大な神学者であり、主教となり、修道規則の礎を作った有名なヒュッポのアウグスチヌスという方がおられます。「神の国」「告白」「三位一体論」などを書き残したことも有名で

すが、その著書「告白」の冒頭で、紆余曲折を経てきたアウグスチヌス自らが、こう告白しています。

「神さま、あなたは私たち人間を、あなたに向けてお造りになりました。ですから神さま、私の心は、あなたの内にと安らぐまでは、真に安らぐことはありませんでした。しかし、今私はあなたの内にも私自身を見出しました」という意味合いのことを告白しています。

つまり、私たちは、神様によって造られたというところに留まるのではなく、絶えず神様に向かって、神様の内に生かされ続けている。言葉を換えれば、神様は、私たちをご自身の命の内にと生み出し、生かし続けようとしておられる。そして、それこそが、神様の望まれることであり、神様の喜びその



をもち崩しもしたし、誤った教えに溺れもしました。このような遍歴を経て、ついに神様

ものなのです。

ともすれば、私たち人間は、肩書や地位、富や一時の満足感や快楽によって満たされることがあります。しかし、アウグスチヌスの信仰に倣うなら、そこに真の豊かさ、喜びを見出すことは寧ろ難しいと言えましょう。しかも、そこでアウグスチヌスが告白していることは、膨大な研究結果ではなしに自らの深い経験、体験に因るのです。アウグスチヌスと時代は違いますが、アッシジのフランシスコやザビエルたちも、当初は地位、名誉、学歴、出世を生き甲斐に、それこそが命そのものであるかのように歩んでいました。時に、放蕩に身を

の中に、イエス様の中に自らを見出したのです。ご自身に向かつて人が生きることを見望まれ、喜びとなさっている神様に向かつて、同時に、その神様の内に生かされ続けていたことに心底気付かされたアウグスチヌスたちは、ついに揺るぎない喜びを掴み取りました。

そして、この5世紀のアウグスチヌスに遥か先だって、イエス様はこう言われます。

「この世のものは全て、何時の日か過ぎ去っていく。嬉しいことや辛いことも、悲しいことや辛いことも、経歴や地位や富や名声も、いつの日か…」

しかし、そういう一つ一つを包み込んでおられる神様がいらっしゃいます。

私たちの内に神様がおられ、働いておられることも勿論のことながら、私たちが喜ぶ時に、喜んでいる私たちが、私たちが悲しんでいる時に、悲しんでいる私たちが、私

ちが感謝する時に、感謝している私たちが、とても感謝など出来ない時に、感謝を捧げる気力も失せた私たちを、ご自身の内に、優しく、温かく包み込んで下さる神様が居て下さるのです。

そのような信仰を授かっ



ていることへの感謝とともに、その信仰を自分の中だけに留め置くのではなく、私たちを通して、さらに外へ外へと、誰かへと広げていくために、神様が私たち一人一人を用いて下さることを祈り、願いたいと思います。

正義と平和協議会講演会

教会と地域の協働を考える

「豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」とともに

目白聖公会 田中 茂朗

1月18日、神田キリスト教会で開かれた正義と平和協議会の会合のなかで、目白聖公会がおこなっている社会貢献活動についてお話しする機会を頂戴しました。

目白聖公会では、2016年9月に無料学習支援「聖シブリアン学習塾」をスタートさせ、2018年7月からはフードパントリー（食糧支援活動）を定期的に開催しています。いずれも、昨今の日本社会で話題に上ることの多い「子どもの貧困問題」を念頭に置いた活動です。講演の冒頭で、この子どもの貧困について実態を紹介させていただきました。

「日本では子どもの6〜7人にひとり相対的貧困層」という報道を耳にしたことのある方も多いと思いますが、この相対的貧困というのはOECD（経済協力開発機構）の定めた基準によるものです。2015年の日本を例

にすると、年間245万円とというのが等価可処分所得の中央値で、この中央値の半分（122.5万円）以下の所得で生活している人たちが社会における相対的貧困層ということになります。さらに、母子家庭にかぎって言えば、じつに51・4パーセントの子どもが相対的貧困層です。

また、今回の講演では、教会と地域自治体やNPOとの協働の重要性も大きなテーマのひとつとしてお話しさせていただきました。

まず、配布する食糧は、日本初のフードバンクであるセカンドハーベスト・ジャパンから提供されるものです。昨年は日本でも食品ロス削減法が施行されましたが、まだ食べられるのに廃棄されようとしている食品をメーカーやスーパーなどから提供してもらい、必要としている人た



田中 茂朗

ちに届けるサイクルのなかで中核的役割を担っているのがフードバンクです。

そして、目白聖公会がおこなっているフードパントリーは、豊島子どもWAKUWAKUネットワークをはじめとする地域のNPOや企業との共催で、パントリー開催の告知には豊島区の協力を得ています。区役所から区内のひとり親家庭に郵送される書類にパントリーの案内も同封してもらおうことで、教会が手を差し延べるべき方々にピンポイントで情報を伝えることが可能と

なっています。

このように他の組織との協働を図ってきた背景には、教会を取り巻く環境の変化があります。コンウォール・リー女史が先導し、聖公会が1916年から進めたバルナバ・ミッションはご存知の方も多いでしょう。当時の日本では資金力、またマンパワーの面でも教会は最強の社会貢

献事業主体だったはずですが、しかし、それから100年以上が経過し、現在の日本社会ではボランティア活動という概念も根づき、多くのNPOが活動しています。一方で、教会は信徒の減少という課題に直面している。こういった環境の変化を考えれば、NPOなどの協働を図り、社会的な拡がりを持つネットワークのなかで教会の存在感を示していくことも必要であると考えたのです。

こうやってNPOなどとの協働を続け、多くの人たちと知己を得ていく過程で再発見したことがあります。それは、NPOなどで働く人たちのなかにクリスチャンが非常に多いということです。彼らと機会などで接すると、目白聖公会という教会の信徒という立場で参加している私に声をかけてくれます。

「じつは、ぼくもクリスチャンなんです」「わたしの父も姉も牧師です」日本のクリスチャンは人口の約1パーセントといわれていますが、社会貢献の現場では、その10倍と言ってもいい

ような高い比率で多くのクリスチャンたちが頑張っている。その現実を知り、強く勇気づけられました。イエス・キリストの教えは社会的なネットワークのなかで、しっかりと生きていたのです。

フードパントリーの基本理念は、病気などで一時的に困窮し、社会から脱落しかけている人たちに再起のチャンスを与えるというものです。したがって、永続的にフードパントリーに依存するケースは本意ではありません。しかし、複数のパントリー会場を渡り歩く「ホッパー」が存在することも事実です。こうした人たちへの処遇はフードパントリーを運営する上でひとつの課題ですが、社会貢献事業は企業活動と違って単純な合理主義で割り切れるものではありません。そういった課題に直面したときこそ、聖書の教えが存在感を発揮すると思います。

教会として、またクリスチャンとして、社会貢献のネットワークのなかで、今後もしっかりと役割を果たしていきたいと思えます。

司祭紹介 ようこそ東京教区へ！

ほどこいてやって、

行かせなさい

司祭林永寅（イム・ヨンイン）

韓国のソウル教区から参りま
したイム・ヨンイン（林永寅）
と申します。昨年4月に東京聖
三一教会に赴任して以来、もう
10カ月が過ぎました。10年あま
り前、京都教区の岸和田復活教
会で3年間働い



たことがありま
すが、相変わら
ず日本語や日本
文化に慣れてい
ないので、慌て
ふためいて過ご
しています。不慣れな環境で新
しい言葉と文化を学びながら、
この世に第一歩を踏み出す子供
のように、しかし最善を尽くし
て牧会をしようと思います。

これまで韓国での私の活動
は聖公会大学で総務所長とし
て働いたこと以外は、ほとん
ど社会宣教エリアでの働きで
した。ナムム（分かち合い）
の家、タシソギセンター、障
がい者センター…。それで、

韓国で私に出会っ
た方々は、私がま

た社会宣教エリアで活動しよ
うとしているのではないかと
思っておられるかもしれませ
ん。しかし、今は若い人に出
会って、み言葉を伝えたいと
思います。私は、「人生はいつ
も新しい日々を迎え、新しい
人々に出会うことである」と
思っているからです。今日は

昨日と異な
る日であ
り、昨日
出会った
人々も今日
出会ったら
また異なる
今日の人々です。
私は古典が好きです。その中
で一番気に入っているのはドス
トエフスキー、そして彼の作品
の中では『罪と罰』です。あま
りにも感動したので、去年の夏、
小説の現場サント・ペテルブ
ルクに行つて参りました。ドス
トエフスキーが住んでいた家と
小説に出てくる登場人物が住ん
でいた家を回りながら、人生と
信仰、生まれ変わる人生につい

て深く考えました。そして『罪
と罰』の主人公ラスコーリニコ
フの人生の転換のきっかけに
なった聖書のみ言葉を思い浮か
べました。その時、娼婦のソー
ニヤは主人公のラスコーリニコ
フに「ラザロの復活」を読ませ
てくれました。その最後のみ言
葉はこうでした。

「ほどこいてやって、行かせなさい。」（ヨハネ11:44）
ラザロを復活させてくださいつ
た後言われたイエス様のみ言葉
ですが、私にとっては新しい人
生が必要だと思つている人々の
ための励ましのみ言葉として感
じました。

いつか機会があれば夏目漱石
の小説をも読んで、彼の人生の
跡を追つてみるのも夢見ていま
す。夏目漱石の小説の登場人物
も不安な現実の中で不安な気持
ちを抱いて生きている者であり、
その姿が『罪と罰』の主人公、
また私の姿のようにも思えるか
らです。

新しく始まる日本での牧会、
皆さんと共に聖書と信仰を通
してお互いに励まし合いなが
ら、新しい自由に向かつて進

む道を案内することが私の役
割であると考え、一歩ずつ前
に向かつて進もうと思ひます。

どうぞ、足りないものである
私のために祈りと応援をよ
ろしくお願いいたします。私
も頑張ります。

どうぞ、よろしく！

司祭 ケイト・カリネイン

アロハ！

私の名前はキャノンケイ
ト・カリネインです。司祭

で、Canon
（主教付きス
タッフ）です。
皆さんから
「キャノンケ
イト」と呼ば
れています。



後、30年以上
にわたつて
司祭を務め
ました。
神学校を卒
業後ロサン
ジェルスにあ
る主に日系ア

昨年12月
から東京教区の聖オルバン教会
の司祭をしています。教会が次
の司祭を決める過程で、候補者
と何回もインタビューをし、主
教の承認を得て新しい司祭を決
めるまでの臨時司祭です。

私は米国ハワイ教区から来
ました。過去4年間ハワイ教
区で牧会をしていました。臨

時司祭として、2期務めまし
た。その前はインディアナ州
で臨時司祭として1期務めま
した。ハワイ教区では主教付
スタッフとして、また、カリ
フォルニア州のサンウォーキ
ン教区でも主教付きとして
務めました。この職名はThe
Canon to the Ordinaryといっ
て、いわば「主教の右腕」といっ
た役割です。

ニューヨークにあるGeneral
Theological Seminaryを卒業

メリカ人の教会、聖公会聖マリ
ア教会に副牧師として勤務しま
した。みなさんの中にはご存知
の方もおられるかと思ひます
が、東京教区出身の秋吉光雄司
祭が主任牧師でした。その後

私はその教会の主任牧師として
11年間勤務しました。
日系アメリカ人、日本人

日系ハワイ人は同じではない
ということが分かりました。
彼らはそれぞれ固有の文化を
持っています。

私が司祭になり、ロサンジェ
ルスにある日系アメリカ人の
教会で牧会を始めたことも、
そして、今、日本の聖オルバ
ン教会を最後に司祭の務めを
終えようとしていることも私
にとって何か大変意義のある
ものと思います。多分私の人
生は完全に一周したような気
がします。ともかく、神様は
私をこの東京に呼んでくださ
いました。私の牧会の最初の
場所として聖マリア教会に私
を呼び、そして今、東京に呼
んでくださいました。

神様が、今この新しい教会
で、私に何を学んで欲しいの
か私は探し求めなければな
りません。この新しい宣教の
場所で、神様が、私に何を
用意してくださっているかを
学ぶにつれて、すべての皆さ
まが私にとっての祝福とな
るのです。
マハロ！（ハワイ語でありが
とう！）

追悼

司祭 ヨブ 内田稔師を偲んで
三光教会 橋本 守

の後任として、と
てもよい司祭だよ」
と話されていたの
を覚えています。

1962年三光教会ジュニ
ア会（高校生の会）のクリス
マス祝会は、90個用意した
シヨートケーキが足りない程
盛況でした。またクリスマス
礼拝には、立教高校校長の縣
先生が出席されると30名の立
教生が迎え、先生は驚きと感
動の中で帰られました。この
頃の三光教会には100名程
の高校生が活動していました。
勿論全員が毎主日に集まった
訳ではありませんが、ジュニ
ア会は毎主日30名から40名が
アコライトをはじめ様々な役
割を担って活動していました。

この学生パワーは1970年
頃まで継続しました。1969
年今井正道主教は「僕は東北教
区を祈りの教区にするよ」と
言って仙台に赴任されました。
この頃の主日出席者数は
140名程でした。この様な状
況下、内田司祭は1969年9
月に着任されました。後藤主教
は車中で「内田司祭は今井主教

の諸活動については
また教会の諸活動については
チャーチカレンダーに合わせ、
年間の活動プランを降臨節から
聖霊降臨日まで
の6ヶ月につい
ては礼拝と共に
「様々な学びのプ
ラン」を、後半
は教会全体での
「交流計画」、例えば5・6月は
野外礼拝や他教会訪問等、7・
8月は教会キャンプ、そして秋
はバザーの実施等を計画的に行
ない、これらを通じ信徒交流を
計り、求道者や新しい働き人の
育成に努め、実際に多くの信徒
や働き人が育ちました。

もう一つ大きな課題として
「教会委員会の活性化」があり
ました。委員の選出方法や若返
りについて色々検討しました。

そして生まれたのが教会委員会
の下部組織としての「各種委員
会」でした。各種委員会の役割
は①多くの信徒に教会運営に参
画してもらう、②担当課題につ
いて十分な検討・協議を期待す
るという事であり、「結論は教
会委員会で決める」を原則にし
ました。また極力兼務はしない
事にし、長く同じ委員会に所属
するのではなく、いくつかの委
員会を経験し、教会の課題を理
解してもらう事
でスタートしま
した。

礼拝は変わり
なくハイマス仕
様のサンングマス
が毎主日捧げられました。そし
て1970年代の中頃から世界
の潮流を見据えていくつかかの
「試み」が実施されました。

それは後の現行祈禱書を想定
しての試みでしたが、対面ミサ・
信徒による聖書朗読・代祷等々
礼拝に於ける信徒の役割・参加
度を高め、より充実した礼拝を
促す試みでした。

私は竹田主教に、聖餐式に
於ける信徒の参加度について

伺いましたところ「聖別禱だ
けは司祭の役割でしょう」と
の答えでした。この結果、礼
拝奉仕者の総数は108名を
数えました。この試みは単な
る試みではなく礼拝の活性化
を実現しました。



放蕩信徒シリーズ (1)

(聖書にある「放蕩息子」のたとえ話から、ワケあって何年か教会を離れ、ふたたび教会に戻ってきた信徒の方に、その離れた理由、また戻るきっかけなどを語っていただき、牧会・宣教のヒントにしてください。という新シリーズです。)

東京諸聖徒教会 宮崎 功

若いころは、仕事で稼いだお金をほとんど宣教や社会活動に使い家庭生活を顧みなかった祖父、それを見て教会と距離をとり、年に数回しか行かない俗にいうお祭り信徒の父のもとに私は生まれしました。そのためか、父に教会へ連れて行かれたり、教会へ行くことを勧められたことはありませんでした。

私が教会へ通うきつかけは、小学校3年生の時に2階に寝ていた私が起きだしている両親に突然教会へ行くと言ったことです。其の週の日曜日に祖母に連れられて池袋聖公会へ行きました。

当時の池袋聖公会は若い人も多く日曜学校も盛んで、私もその中に入れてもらい楽しい教会生活を送る事が出来ました。小学校6年生の時、友人の勝田君が洗礼を受けるに聞いて私も一緒に受けたらと思う、その年の主教巡回日に後藤主教に洗礼を授けていただきました。洗礼を受ければ自分も

ちゃんとしたクリスチャンになれると思ったのですがそうはならず、「このまま教会生活を続ければ数年後に堅信式を受けることになる。これはまずい」と思い、信仰が固まるまで少し教会との距離を置こうと、父のように年に数回教会へ行く生活を始めました。

高校はミッシヨンスクールに入り、その学校の聖書の時間に習ったことを父にぶつけたことがあります、教会の歴史があまりよく分からない父に「長くクリスチャンとして生きてきたのにわからないんだ」と言ったところ、父は「教会の歴史や教理がわからなくても、イエス様の復活やイエス様がいつもそばにいて、私を支えてくれているのを私は信じている。それでいいんじゃないか」と言いました。お祭り信徒と想っていた父が子どもに対してとはいえず、はつきりと信仰告白をしたことに、私は返す言葉がありませんでした。ますます教会に行きづらくなりました。

それから約20年たち祖母が亡くなり、池袋聖公会で河野司祭にお葬式をしていただきました。その1、2週間後の日曜日、感謝の気持ちで久しぶりに礼拝に出席しました。礼拝後、当時の池袋聖公会は畳の部屋で昼食をとる習慣でした、昼食をとっている

と後ろの方から、「私もイエス様がおられるか不安になることがあります、でもその時は一生懸命に祈り、イエス様のみ跡に従っていいこうと求めれば、又イエス様が見えてきますよ」という河野先生が女の人と話している声がきこえました。牧師さんでもイエス様が見えなくなる時があるのなら、私のようなものに見えてこなくても当たり前前だ。イエス様を求め祈り続けられたいんだと思うようになりまし

た。20数年間も教会をさぼり続けたので池袋聖公会には行きづらいなど考えていたところ、いとこの結婚相手と私の母が堅信を受けると言うので私も受けることにし、いとこの通っていた東京諸聖徒教会で竹田主教より堅信を授けていただきました。

洗礼から堅信までの20数年間は私にとって必要な時だったと思います。もし洗礼を受けた後、悩まずに堅信を受けたら、おそらく年に数回教会に行く信徒になっていたと思います。

よく教会で「家の息子が、孫が洗礼を受けた後、教会に来ない。なんとかしたい」という声がきこえますが、私はあまり心配することはないと思っています。神さまは必ず「その人の時」が来たときに導いてくださると信じています。

【司祭の1冊】

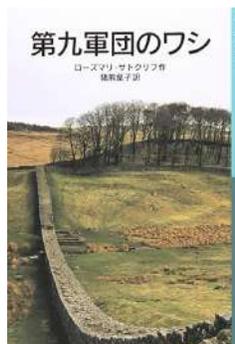
『第九軍団のワシ』

ローズマリー・サトクリフ著
猪熊 葉子訳

司祭 Mark William Stanli

爆発的な人気を博したハリ・ポッターは、J・K・ローリングの想像力からのみ生まれたものではありません。大学で古典文学を専攻した彼女は、教養に裏打ちされた文才を作品の中で開花させたのです。同じように教養豊かで技巧力のある作家としてローズマリー・サトクリフが挙げられます。

彼女は、1950年代から多くの作品を残しましたが、ここで紹介する『第九軍団のワシ』は、



サトクリフの技巧力は比類ないものですが、ベースにあるのは史実です。舞台も地理的に正確です。ローマ

その中で最も有名な作品です。この本は、少年文庫に分類されていますが、決して子供向けと侮ることは出来ません。サトクリフがインタビュで答えています。

「私の本はあらゆる年齢の子ども向けのつもりです。つまり、9歳から90歳まで。」

時代は、紀元前200年。ローマ帝国の支配下にあるブリトン人の悲願を描きつつ、ローマ側にも同情を寄せる内容です。マーカス・アクイラが20年前にスコット

ランド北部で消息を絶った父親率いる第九軍団の痕跡を追い求める話です。軍団の黄金のワシの紋章も先住民に奪われたとされます。

しかし、マーカスはブリトン人との戦いで負傷し、戦力外になります。療養のため、南方の叔父の所に身を寄せているとき、敵の奴隷の命を助け、親しくなります。マーカスは、先住部族が黄金のワシを奪ったままだと聞き、奪還を決意します。同時に敵前逃亡したと噂される第九軍団の汚名を返上しようとして

ます。サトクリフの技巧力は比類ないものですが、ベースにあるのは史実です。舞台も地理的に正確です。ローマ帝国の前哨基地の描写も史料に忠実です。先住部族の生活様式なども、可能な限り正確に描かれています。多くの史料を基に当時の空気感、険しい旅路、むき出しの自然、横暴さ、同胞愛などが文章に巧みに織り込まれています。第九軍団は確かに、紀元前171年に消息を絶ち、年を経て1866年に黄金のワシが今のイギリス、ハンブシャー州シルチェスターで発見されました。どのようにしてその地に至ったかは是非、作品にて！

さまざまな働き [4]

ようこそ八王子幼稚園へ

八王子で一番古く、一番小さな聖公会八王子幼稚園は、今年で108年目を迎えるようとしていきます。八王子の街中、甲州街道から一筋入ったビルの谷間にあります。

現在園児数は、満3歳児から5歳児までの4学年4クラスで36名。100年の間、宗教法人として教会と共に歩んできた幼稚園は、保育内容を変えずに、経済的安定を図るため、また変わりつつある幼児教育の未来を見据え、教区会で承認して頂き、8年前に学校法人に移行しました。



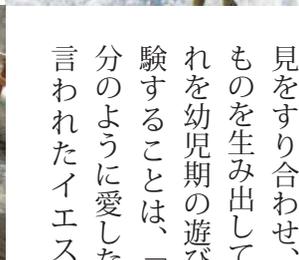
幼稚園の特色、キリスト教保育・少人数保育・自由な遊びを大切にしている保育は、法人格が変わっても守り続けられています。幼稚園の大きな保育テーマ「つながりあって」は、「神さまと子どもと先生と保護者と教会と地域と皆がつながりあっている幼稚園」という願いから、前園長の岩前宏



司祭が言語化し、それ以来幼稚園に携わる者の意識の中に受け継がれています。では、そんな幼稚園の生活は？…。キリスト教



幼稚園生活の大事な柱である礼拝。毎週月曜日に子ども礼拝が復活教会の聖堂で行



に仲間の言葉が寄り集まって形となっていく面白さ、楽しさを子どもたちは遊びを通して経験します。自分の思いを言う。相手の思いを聞く。自分と仲間の意見をすり合わせ、より良いものを生み出していく。それを幼児期の遊びの中で体験することは、「隣人を自分のように愛しなさい」と言われたイエスさまの教えに通じるものだと思います。そして、神さまに愛され、活かされることに

神さまのお話をして下さいます。しかし、満3歳児にとつて？…。頭の中はフアントミミラージュ！それが5歳になると、主の祈りを唱え、神さまの存在を知るようになり、お友だちのためにお祈りする心も育ってきます。心の中に蒔かれた小さな種からは、時間をかけて少しずつ芽が出てくるようです。

では、少人数で自由な遊びを大切にしている子どもたちの姿は？…。子どもも先生もとにかくよく遊ぶ！。漠然としたイメージ

気付き、そのことに感謝できる心をもっと大切にしたいと願っています。

どうぞこれからも、この小さな幼稚園が、神さまの愛を伝える道具として用いられますように、祈りお支えください。

園長 大森 弥生

《信徒リレーエッセイ》
最善を尽くせ 一流たれ
神のために

聖路加礼拝堂

山口 喜義

聖路加国際病院・大学は、鎖国で欧米より遅れた医学環境の中で病に苦しむ日本の患者のために最先端の医療を実現したい、イエス様がなさったように病で苦しんでいる人と家族を救いたいとの強い思いで設立されました。

患者・家族・医療人は死や人間の力が及ばない事態に直面することが多く、祈りの場が絶対に必要なため病院の中心に礼拝堂が作られました。表題の言葉は創立者トイスラー博士が同志だったポール・ラッシュ博士（米国募金で聖路加を支えた他、日本の高冷地農業者が貧困を脱却し幸せになるための酪農等を清里で実現）に贈った言葉です。

自分や自国の損得しか考えないトランプ流の風潮が蔓延し、事件や国際紛争が頻発しています。共に生き、皆が幸せになるために「神のために」を大切にしたいものです。

みんなで作る

クリスマスパーティー

「わたしたちは、障がいのある人もそうでない人も、子どももおとなも皆ひとりの人間として尊厳を持っていきます」。

この趣旨で行われている、外濠教会グループと障関連共催の「みんなで作るクリスマスパーティー」も19回目を迎え、2019年12月7日、目白聖公会で行われました。始めの礼拝の後、4グループに分かれ、それぞれみんなのできることを担当して、みんなでパーティーを作りました。

【ハンドベルグループ】

ハンドベルグループは、異なる和音を担当する3チームに分かれて、歌詞の横に引かれた線の色(チームの色)に従ってハンドベルを鳴らすことで、曲を美しく楽しく伴奏することを目指しています。最近では『きよしこの夜』『赤鼻のトナカイ』『あらのはての3曲を演奏しています。ちなみに、初期の頃からずっと①チーム(ドミソ担当)に属して力強くベルを鳴らしてくださっているコイノニアの

お二人を、私は密かに「鉄壁の①チーム」と呼んでいます。(酒井留美)

【手話のグループ】

手話のグループは、ハンドベルグループと同じく『きよしこの夜』『赤鼻のトナカイ』『あらのはてに』の3曲の歌詞の手話表現を覚えます。指や手の向きの難しいところ

もありませんが、皆さんあつという間に身につけて、曲にあわせて、声で歌いながら、手話でも歌います。最後にハンドベルグループと合わせて発表します。毎年聞こえない方が参加してくださりますが、とても励みになります。(杉石めぐみ)

【お食事グループ】

パーティーのお食事を楽しく準備します。2019年は、ピザ・ちらしずし班、カナッペ・フルーツポンチ班、ケーキデコレーション班がそれぞれ腕をふるいました。「おいしい!」



キデコレーション班がそれぞれ腕をふるいました。「おいしい!」

らせること、笑顔でたくさん食べてもらえることが、参加者にもボランティアにも大きな喜びです。手洗い、マスク、使い捨て手袋着用等、衛生には十分注意して作業を行っています。(館岡真木子)

【工作グループ】

工作グループは、毎年パーティーの食卓に彩りを添える飾りを作っています。今年は牛乳パックを利用したランタンを作りました。行燈型にくり抜いた牛乳パックに、色紙と星やツリーのモチーフを貼り、中にキャンドル風のライトを仕込んで屋根をかぶせれば完成。作品発表のときは、会場が暗くなった瞬間に「おお!」と歓声が上がります。皆でランタンのほのかな灯りを見つめました。2020年の工作もお楽しみに!



最後は「みんなまでページ

最後は「みんなまでページ

ちょっと聖書、ときどきユーモア(四十七)

1. 子どもの現実

信徒A「子どもたちは、学校が終わってもすぐ学習塾に行ってる勉強、勉強だね」

信徒B「子どもたちにとって受難の時代だよ」

信徒A「だからネーミングも変えた方がいい」

信徒B「どんなふうにする?」

信徒A「学習“受苦”」

2. サタンの誘惑に負ける?

信徒A「ぼくはサタンの誘惑に負けたよ」

信徒B「いったい何があったんだい?」

信徒A「堅い『いし』をパンに変えてしまったんだ」

信徒B「どういうこと?」

信徒A「ダイエット決意したけど、たった1日でその堅い『意志』が、美味しそうなおパンを前にして、もろくも崩れ去ったんだよ」

3. 思いはあるけど・・・

信徒「先生、今月から献金を倍に増やしたいと思います」

牧師「それは素晴らしいと思いますが、急にそんなこととして大丈夫ですか」

信徒「大丈夫ですよ、ただ“増やしたい”と思うだけですから」

ント」。その場で配役を決めて衣装をつけて始まりませぬ。セリフはありませぬが、ナレーションに従って登場人物が動くだけの単純で素朴な劇で、キリスト生誕の場面を皆であつという間に美しく作り上げました。今年も、ピアノのBGMを取り入れたり、記念撮影をしたり、とても楽しくできました。このように「みんなで作るクリスマスパーティー」は、



あし早くイエス様の降誕をお祝いします。次回はあなたも参加してみませんか? 次回イースター号 4月12日 発行予定